

——「人はどこからでもやり直せる」潮騒ジョブトレーニングセンター理事長 栗原豊——

私は戦争真ただ中の昭和18年生まれで、父は2歳になる前に南方で戦死しました。母は兄と私を置いて再婚してしまったので、二人で里子に出され、遠い親戚にあたる養母に引き取られました。

貧しくていつもお腹を空かせていて、養母から冷たい仕打ちを受けることもしばしばでした。小学校に行けば「もらいっ子」と呼ばれていじめられて、何かにつけて親父がいればと思ったね。死んだことを怒りに感じていました。

成長するにつれ、自分をこんな境遇にした国に恨みを抱きました。だから、法律を破るのは当たり前で、中学に上がると13歳にして酒を覚え、毎日のように補導されていました。それで、17歳の時、鑑別所に入れられるんです。

そのうち、反社会組織と仲よくなり、薬物に手を染めました。

20歳過ぎで結婚して娘が生まれ、家庭を持った時期もあるんです。ただ、ほとんど家庭を顧みない父親でしたから愛想を尽かされ、塀の中にいた35歳の時、離婚届にハンコを捺しました。

こりゃ、きつかったですね。求めて得た家族を一瞬にして失ったんです。この現実が一層反発心を強め、一家の長としての責任からも解き放たれて、出所後は薬の量が日に日に増えていきました。

それからは何をやってもうまくいかなかったです。薬が切れると何も手につかず酒に<sup>おぼ</sup>溺れました。

社会に居場所がなく結局7回の服役を経験し、2003年、最後に刑務所を出た時、誰も待ってはいませんでした。気がつけば60歳。すべてを失ったんです。

ただ、その夜泊まったホテルで酒を飲んでしまっ<sup>もうろう</sup>て依存症が再燃し、酒を買う金欲しさにトラブルを起こしました。朦朧としながら目を覚ますと、大宮署の留置場に寝かされていました。

「何だよ……、またかよ……！」目の前が真っ暗になりました。裁判所に行く前には拘留期間があります。間もなく満期、懲役を覚悟して待っている時でした。

前に何度もお世話になっていた検事と再会し、ほとんど調書らしきものも取らずにこう言われたんです。

「よう栗原よ、おまえダルクに行け。そこで何とか治せ。起訴猶予にしておいてやるから」それが武藤昇という人でした。

我々のような依存症者にいくら厳罰を与えても治らない、意味がないということを経験から知っていたんでしょう。だけど、これがもう嬉しくてねえ、何しろ初めて「許された」んです。十代の頃からいつも厳罰を以って裁かれてきた人間が、許されたんです。ここで懲役をくらっていたら、憎しみにまみれて人生が終わっていました。検事のおかげで人間の情が<sup>よみがえ</sup>蘇ったんです。

初めて自助会のミーティングに出席した時は、衝撃を受けました。水商売の女性が、男をだます手口を赤裸々に話しているんです。ここは俺のいるところじゃない、と思いましたね。60歳までの生き方は、墓場まで隠し通さなければいけないと思っていたからです。

最初は何も話せませんでした、そのうちに考えが変わりました。ミーティングを重ねるうち、過去を隠し通すのではなく、弱さを打ち明けることで、生きづらさが生きやすさに変わることを実感しました。

少しして茨城県の鹿島ダルクに移りました。もう60でしたから、ここで自分を変えなければという思いもあって真剣にプログラムに取り組み、数か月後に研修を受けて施設のスタッフになりました。

施設のためにと、日々銀行や役所を周り、暇さえあれば植木の手入れやら掃除も率先してやりました。働きが認められて、入所半年で寮長に任命されたんです。

それまで毎月のように、武藤検事から「いま、何やってる？」と電話をもらっていました。寮長になったと伝えると、「そうか、よかったなあ……」としみじみ呟かれました。「きょうで起訴猶予は解除しておくから」と言い残し電話は切れました。

武藤検事との出逢いは、かけがえのない財産でした。

実は留置所を出る時、ある“条件”を出されていました。それは「自分が回復したら、同じ境遇にある人を助けてやれ」という約束でした。

そして寮長として過ごすうちに、自分の施設を持ちたいと思い立ちました。

62歳の時です。

運営資金も頼れる人脈もなければ、わずかな仲間と、同じ依存症当事者で再婚した妻を除くと支援者はいませんでした。

初めの頃は部屋にぎゅうぎゅう詰め、ダルクとは名ばかりで回復のプログラムもない状態でした。苦労を共にしてきた仲間たちもスリップ（薬物再使用、再飲酒）が相次いで、たちまち崩壊の危機でした。

そんなとき、千葉県内のアルコール依存症治療で有名な秋元病院さんにご縁ができ、独自のプログラムができていきました。とは言え、コンビニで万引きする仲間がいたら、すぐ私が行ってお金を払い、必死でお詫びをする、そういう苦労は絶えずあります。

現在、就労支援に力を入れて、常時300人が通う大所帯に成長してこられました。回復を見守る上で大事なことは罰を与えない、裁かないこと。私は武藤検事に「許す」ことを教えられました。他人ではなく、自分を変えることです。

60歳で終わっていたはずの人生、酒も飲まず薬も使わず、20年を迎えました。

親を恨んだこともあったけど、いまは丈夫な体に産んでくれたことに感謝しています。

人はどこからでもやり直せる。昔の過ち、恨みや怒りといったマイナスの感情も、世の中のことはすべて、ひっくり返してみれば感謝に変わるんだね。

